阿弥陀・不動毘沙門天像懸仏

径四七・七糎
康暦二年（一三八〇）
京都国立博物館蔵

伝来

ここに取り上げる懸仏は、昭和十二年に香取秀眞氏によって、京都市の伊藤庄兵衛氏の所蔵品として紹介された周知のものである。[1] この時、香取氏はご自身が所蔵する懸仏とあわせて紹介されたが、それは、その両方ともに滋賀県の金剛輪寺に伝来したものであったからである。しかし、その後、この懸仏は伊藤庄兵衛氏の手を離れ、半世紀ほどその所在がわからなかったが、縁あって昭和五十四年に本館の蔵品に加えられたのである。おそらく金剛輪寺からは明治の神仏分離・排仏棄釈の際に出たものと思われるが、つとに著名であったにもかかわらず半世紀ほど実見することができなかったのである。

この金剛輪寺は、百済寺、西明寺と共に湖東三山の一つにあげられている、天台宗の寺院で、滋賀県愛智郡秦荘町大字松尾寺にある。寺伝によると、聖武天皇の勅願によって、天平十三年（七四一）に行基菩薩が開いたと伝える古刹である。[2] 金剛輪寺の歴史を知る史料は比較的少なく不明の部分もあるが、近江守護の佐々木氏の帰依が篤かった関係もあって、鎌倉時代には当寺の隆盛期を迎えることになったのである。そして、又、空白の時代がつづくが、この間を埋めるのがこの懸仏である。当寺はその上残念ながら織田信長の兵火に襲われたことによって、隆盛をきわめた時の堂塔伽藍のうち、本堂大悲閣、待龍塔、二天門などが災害をのがれた以外、ことごとく灰燼に帰したのである。その意味で、南北朝時代の金剛輪寺の空白を埋める上でこの懸仏の果す役割は大きい。その上、昭和四十八年の文化庁美術工芸課による湖東地域の総合調査の際、これと同形式、同年代のものがもう一面確認されるに至り、ますますその重要性が増していったのである。[3] ここでは、まず懸仏の品質・形状を述べ、裏面の銘文について言及したい。[4]

品質・形状

懸仏の径は四七・七センチと、懸仏のなかではどちらかと言えば大形の部類に属する。裏板には約三センチの厚みの桧材が用いられ、それは中央で二枚継ぎになっているが、その桧板上にこれも四半分の銅板、これを内外区を区分する圏線や周縁覆輪で留められている。こうして作られた円形の鏡板面を、いわゆるかまぼこ形（半截管）の界線で内外区にわけ、その内区には中心に阿弥陀三尊像が配され、下部には仏堂内を荘厳した法具が配されている。中央に蓮台（木芯に薄銅板の蓮弁を貼り付ける）に坐す銅板打ち出しの阿弥陀如来像が、その左右には岩座とも一鋳の、それも銅板打ち出しで作られた不動明王立像と毘沙門天立像が配されるといった、独特の三尊形式をとっている。中尊は透彫り舟形形式の光背（これは中心で二枚合わせになっ

ている)を負っているが、三尊ともに薄金銅板製の花形の天蓋が釘留めされている。この天蓋にはそれぞれ瓔珞が取り付けられていたが、その多くは欠損している。像の下方にはこれも中心で二枚合わせになっているが、薄金銅板製の蓮池が表わされている。そこに桧板に銅板で枠をつくる花先形をした卓上に、火舎と六器が取り付けられている。蓮池から派生した表現をとるが、花瓶が左右におかれている。このように内区の上、下部には仏堂内を荘厳した形式が表現されていると言えるのである。この形式は、同じ滋賀県の明王院に伝来している。[5] 外区には吹き寄せ式に大形の飾鋲が付けられ、その間に半肉彫りの三鈷杵の金具が取り付けられている。周縁には広幅の覆輪がめぐらされているが、側面にも外区と同様、飾鋲とその間にここでは薄金銅板の三鈷杵であるが、取り付けられている。釣鐶座はもとは獅噛座に宝珠形鐶台を付していたと思われるが、現在はこの鐶台は欠失している。獅噛座の作行は決して良好とは言えない。

銘文

ここで裏面の墨書銘をみてみると、

奉懸
三所権現熊野証誠殿御正体
右為天下大平(ママ)山内安穏寺中静謐
興隆仏法心中善願成就也仍所修若斯
康暦二年庚申十二月七日願主千行
大工坂上末光

とあるが、比較する意味で、旧香取家蔵と金剛輪寺の銘文を紹介すると、

奉懸
松峯山金剛輪寺本尊御正体
右為天長地久御願円満寺中中
静謐興隆仏法庄内安穏諸人快楽信心
施主心中善願皆令満足也仍所修若斯
康暦二年庚申十二月七日願主千行
大工坂上末光

奉懸
三所権現十禅師御正体
右為天下静謐山上山下安穏太平(ママ)
殊寺中繁栄心中善願成就也仍所修若斯
康暦二年庚申十二月七日願主千行
大工坂上末光

とある。これがそれぞれの裏板に墨書された銘文であるが、一見して銘文の形式は同様であるということは肯かれる。願意の表現がすこし異りをみせているが、ほぼ同様の内容と言えなくもない。願意を分類してみると、願主千行は、「天下泰平」「山内(庄内)安穏」「寺中静謐」に加えて、「仏法興隆」を願うなかで、「諸人快楽」「心中善願」なども合わせ願ったと言うことになろう。残念なことに康暦のころの金剛輪寺のことはよくわからない。そのことから言えば、この願主千行による奉納の背景がどのようなところにあったのかいまひとつ明らかにしえないが、内容からすると、奉納される側にきっ

図１　阿弥陀・不動毘沙門天像懸仏　康暦二年（1380）　京都国立博物館蔵

図１-(1)　裏面

図１-(3)　部分

図１-(2)　部分

図２　聖観音・不動毘沙門天像懸仏　康暦二年（1380）　香取家旧蔵

図３　地蔵・不動毘沙門天像懸仏　康暦二年（1380）　滋賀　金剛輪寺蔵

かけがあったように思われる。三所権現の「熊野証誠殿」、「十禅師」、「本堂」にとそれぞれの奉納場所は墨書から読みとれる。銘文のうちに棒線を引いたが、これは後世に墨で消された部分である。これは金剛輪寺から流出した際にその伝来を隠すために墨で消したものと思われるが、幸いさきの如く解読できたのである。松峯山は金剛輪寺の山号であり、本尊は聖観音である。この懸仏も同じ三尊形式で中央に聖観音像が、その左右に不動明王と毘沙門天の立像が配されるなど、本館蔵のものと同様の作行を示しているし、透彫りの舟形光背を負った中尊像、いずれも薄銅板の花形の天蓋が付いているなど、全く同じ構成をとっていることが明白である。

さて、この懸仏で注目したもう一つの理由は、大工（制作者）が確認できることであろう。大工の坂上末光というのは一体如何なる人物であったのか明らかにしえないが、懸仏に大工名が誌されているのも数例であり、記録しておく必要がある。金剛輪寺に近いところでは、すこし時代は降るが、さきの明王院の懸仏に、長春、長順という同じ長のつく大工の名前が明らかにされているが、[6] 制作の面から言えば、大工の追求はこれからである。

このように本館蔵のこの懸仏は滋賀・金剛輪寺に伝来していたことは明らかではあったが、その作行からみても良好の部類にはいり、さらに同形式の二面の懸仏の銘文が確認されたことは、この懸仏をより一層重要な遺品にしたと言えるであろう。

（当館資料調査研究室長　難波田　徹）

〈注〉

1　香取秀眞氏「懸仏について」（『美術研究』第七十号　昭和十二年）。これは懸仏研究の基となった注目すべき論考である。

2　金剛輪寺編『金剛輪寺史伝』（昭和四十一年）。

3　文化庁文化財保護部美術工芸課編『湖東地方の文化財（文化財集中地区特別総合調査報告第十二集）』（昭和四十八年）。この総合調査の際に、金剛輪寺には地蔵菩薩像懸仏の他に、八面の御正体のあったことが確認されている。

4　拙稿「懸仏とその銘文をめぐって」（『MUSEUM』三九三号　昭和五十八年）。ここでは五面の懸仏についてその銘文を中心に論じたが、その一面として阿弥陀・不動毘沙門天像懸仏を取り上げている。

5　応永二年（一三九五）、応永三年（一三九六）、応永十三年（一四〇六）銘の金銅不動明王二童子像懸仏がこの形式のものにあたる。

6　叡山文化綜合研究会編『葛川明王院』（昭和三十五年）。「近江の金石文（一）」（『考古学雑誌』第五十七巻第一号　昭和四十七年）。辻本直男氏「明王院の懸仏」（『比叡山を中心とする文化財（文化財集中地区特別調査報告第二集）』（昭和三十八年）。拙稿「葛川住民と懸仏」（『立命館文学』第四二二・四二三号　昭和五十五年）。